

招待講演3、第19回日本緩和医療学会学術大会、2014. 6. 20（神戸）

（第19回日本緩和医療学会学術大会プログラム・抄録集、120、2014）

質的研究と量的研究を架橋する

高木廣文・東邦大学看護学部

【はじめに】 エビデンスに基づく医療（Evidence Based Medicine）の基盤は、統計学に基づく研究デザインと解析方法である。一方、看護研究では情報提供者のインタビューに基づく質的研究が増えている。また、同一の研究において量的研究と質的研究を混在して使用するという Mixed Methods（混合研究法）も使われ始めている。しかしながら、人間を対象とする学門領域で、基本的なパラダイムが異なる量的研究と質的研究の方法論を、無批判に同時に使用することは可能なのかという疑問もある。

【量的研究と質的研究】 量的研究の科学性を問題にすることはほとんどないが、質的研究の科学性を問題にすることがある。しかし、研究方法の科学性を議論する場合、量的研究と質的研究とは本質的にどのような研究なのか、さらに『科学』とは何かを明確にする必要がある。現象学的にみて、主に自然事象（モノ）を研究対象とするのが『量的研究』、心的存在の中に生起する現象（コト）を扱うのが『質的研究』であると考えられる。

量的研究は、様々な現象を測ることによりデータを収集するために、客観的であり再現性も高い。一方、人間の心的存在である主観的な内部世界の現象に関しては、他者との共通理解を得ることが極めて困難であり、本来的に対象者からの言語による情報などがなければ、研究は不可能である。

【科学とは何か】 基本的な科学哲学として、Popperの反証主義やKuhnのパラダイム論などがあるが、科学の本質を捉えるためには、構造主義科学論が有用であると考えられる。『科学とは同一性（構造や形式）の追求であり、科学理論（モデル）の善し悪しは、目的とする現象をいかに上手に説明できるかによる』。科学的研究では、構造、理論、モデル、システムなどを仮定し、ある現象を演繹的に説明し、また将来の予測を行う。

【主観的テキスト解釈の科学】 量的研究で解析方法論としての統計学を問題にすることはないが、質的研究では主観的なテキスト解釈が常に問題とされる。テキスト解釈の問題について、科学的言語学の考えを踏まえ、その科学性について考えてみたい。